野田宇太郎 文学散歩 別巻1

野田宇太郎 文学散歩

別巻1

文一総合出版

著者略歴　明治42年（1909）10月，福岡県筑後松崎に生れる。朝倉中学卒業後病気で学業を断念，久留米で詩作に入る。東京に移住して昭和23(1948)年まで，出版編集に携わる。その間，雑誌『文藝』，つづいて『藝林閒歩』の編集責任者となり，以後，著述生活に入って詩作と近代文学史研究に専念。『新東京文学散歩』に始まる文学散歩を発表して“文学散歩”を創始。文学散歩本の他，全詩集『夜の蜩』，近代文学研究『日本耽美派文学の誕生』，木下杢太郎研究『きしのあかしや』，近代詩史『詩人と詩集』，キリシタン史『少年使節』，紀行随筆『日本の旅路』，戦中記録『灰の季節』，戦後記録『混沌の季節』など著作多し。昭和16(1941)年，第1回九州文学賞(詩)受賞，昭和50（1975）年度藝術選奨文部大臣賞受賞，昭和52（1977）年，第3回明治村賞受賞および紫綬褒章受章。

野田宇太郎文学散歩　別巻1
新東京文学散歩

昭和54年6月10日　初版第1刷発行

著　者　野田宇太郎
発行者　佐藤　弘一
発行所　株式会社文一総合出版　東京都千代田区神田神保町1－32
電話東京(291)8049　振替東京2-42149

©1979
0395-90125-7354　印刷・製本　奥村印刷
定価は，函・帯に表示してあります。

目

次

叙　日夏耿之介　六

上野・本郷・小石川・お茶の水　七
かどで　「於母影」の町　露伴の「五重塔」　鈴木春信碑
観潮楼跡　「猫」を書いた家　「三四郎」の池　「雁」の坂
「湯島詣」　秋聲遺宅　「スバル」の坂　一葉終焉の地
蝸牛庵跡　菊坂をすぎて

日本橋・両国・浅草・深川・築地　三三
八重洲橋　水の都　瓢箪新道　両国橋　新片町　浅草にて　永代橋　勝閧橋

中洲・佃島・銀座・日比谷　一〇五
空想の中洲・現実の中洲　「春」を書いた家　佃の渡し
銀座雑感　数寄屋橋　有楽門

飯田町・牛込・雑司ケ谷・早稲田・余丁町・大久保　一四一
馬琴の井戸　硯友社跡　屋上庭園社あと　神楽坂　藝術倶楽部跡　十千万堂跡　赤城の丘　雑司ケ谷墓地
早稲田演劇博物館　猫の墓　須磨子の墓　余丁町にて
瘤寺界隈　八雲終焉の地　藤村遺跡

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

高輪・三田・麻布・麹町　三一〇
小波の家　白金附近　三田演説館　紅葉館廃墟にて　透谷終焉の地　飯倉片町の谷間　偏奇館跡　龍土軒　番町文人町廃墟
田端・根岸・龍泉寺・向島・亀戸　三六七
子規の墓　澄江堂廃墟　子規庵附近　龍泉寺界隈　向島にて　「片恋」の町　直文歌碑　左千夫の墓
武蔵野　三四四
獨歩詩碑　鷗外墓域　「武蔵野」のあとを辿る　多磨墓地にて　蘆花恒春園
追補記　三四一
谷中墓地　上田敏の墓　柳浪の墓と孤蝶の墓　ケーベルの墓　二葉亭の旧居　與謝野寛・晶子の墓
挿画　織田一磨

新東京文学散歩　上　　おぼえがき

敗戦国民となり、暗い絶望にとざされた東京の無残な焼け跡に佇んだ人ならば、誰しも一度は、これではいけないと思ったろう。わたくしが近代文学の基礎を築いた先人達の記録を作ろうと考えたのも、日本人としては当然のことである。ようやく日本読書新聞に月一回の特集としてその一部を発表することになり、焼け跡の東京を歩きはじめたのは被占領下の昭和二十五年十一月であった。それは翌年一月から『新東京文学散歩』の題名で掲載されたが、新聞執筆の原稿枚数には限度があるので、わたくしははじめからそれに併行して自由な枚数の原稿を書きつづけ、その書き下ろしを昭和二十六年六月に刊行された日本読書新聞社版の単行本に収めた。当時は焼け跡の写真は進駐軍の検閲がきびしかったので、織田一磨画伯にいつも一緒に歩いてもらってわたくしの書いた場所をスケッチしてもらった。その本は昭和二十七年二月に早くも角川文庫になったが、意外にも忽ちベストセラーになってわたくしを驚かせた。つづけて書いていた原稿もそのまま文庫本で続篇として出版されたが、本巻はその正篇である。この本の一部は高校や中学の国語教科書にも採用されたが、わたくしは当初の目的通りに約五年の空白を置いて再び新らしく『東京文学散歩』決定稿の執筆にかかったので、文庫本は絶版にした。そして今日まで二十年以上になる。この『新東京文学散歩』はわたくしの文学散歩の初心であり、起筆以来既に三十年にも達するので、記念の意味も含めて昭和二十七年初版の文庫本を底本とし、この文学散歩全集の別巻に収めることにした。文学散歩が本来わたくしの造語による著作であることはいうまでもないが、それさえ知らぬ新時代の読者には歴史の証言となり、また二十年昔の読者には若き日の思い出の資ともなれば、まことに幸である。

（著者）

新東京文学散歩　上

敍

徳川の頃に当代の知識者であつた儒門の人々や詩人雅客などのなきがらを埋めた墳墓をあさり確める掃苔のことは、その時代の中期以後末造かけてから明治に及んで先覚の手により一まづその業が試みられた。しかし、遺趾の査定などは十分であつたとはいへなかつた。明治から正・昭間にまたがる文墨翰林の人々の探墓や遺趾の訪古に至つては、今代の若き人々の静かな興趣ある責務であるが、曾て進んで事に当る人をば未だ見なかつた。その人を得なかつたにも理由があるが、事の重さを解せぬ人が多かつた所以は、昔と今との固きつながりの情の論理を解せぬ昧者が世にはびこつてゐるからに外ならず、生なか文筆を執つて生業とする小粒の輩よりも、市井読書人の間にその逸興が動いたのは、直截に純粋に過去の文業の高さを見るからであらう。

野田宇太郎氏は考古家の足と頭と、詩人の目と胸とを用ゐて丹念精密に尚何人も手を染めぬこの必要なわざの探索に踏み入り、この先駆の書をまづ成して夥しき人々の歓呀を受けた。この書は尚頁を補ひ巻をつづけるべきであり、誠実の人である野田氏は必ずその業に耐へるであらう。このたのしくうれしき書物が、ライブラリイ本として普及することを特に意義あるものとして一部真摯な読書世界の為にわたくしは怡ぶものである。

昭和廿六年師走初九　　於阿佐ケ谷第四街

日夏耿之介

上野・本郷・小石川・お茶の水

かどで

忘れもしない、昭和二十年一月二十九日の午過ぎだつた。その日の早暁にかなり激しい焼夷弾落下があり、本郷一帯に火災が起きたので、私は知り人を見舞ふ目的で、まだ危険ではあつたが、西片町のK先生のところへも行つた。西片町は焼けてはゐなかつたが、近くの東片町方面にかなりの被害があつて、町は死のやうにひつそりとしてゐた。殆ど家を焼けるものとして疎開した人が多かつたせゐでもあらうが、K先生はそこに住まれて、毎日大学に通はれてゐた。私がお訪ねすると、先生は留守であつた。表に出てみえた奥さんにたづねると、今朝の爆撃で団子坂方面が焼けてしまつたので、森さんのお宅（観潮楼あと）がどうなつたか、一寸見て、それから大学へ行くと云つて出かけました、

と云はれた。

その時私は鷗外の思ひ出を胸一杯に抱いて荒涼たる団子坂上の焼跡に立つたK先生の孤独な姿を想像した。

それからまもなくK先生は病床に就かれ、再生する祖国の姿も見ずに逝かれた。一年たつて、私はK先生を記念する心持から或る文藝雑誌を創刊したが、その二号を「観潮楼」の記念号とすることにして、昭和二十一年の二月、私は写真屋をつれて本郷に出かけた。その時、私が案内してもらつたのは、同じ本郷駒込千駄木町の、焼け残りの一角に住む老作家のT氏だつた。T氏は幾度となく焼夷弾に見舞はれ、辺りは次々に焼け失せてゆく時、一人いつも和服姿のくつろぎを見せて、書斎に静坐してゐた人だつた。その時も和服の著流しであつた。私たちは千駄木界隈を肴町の市電（まだ都電とは云はなかつた）停留所の方へ焼けあとを歩き、毀れた寺の前などを通りながら又元来た方へ帰つた。私が観潮楼のことを話した時、それならば夏目さんの「吾輩は猫である」を書いた齋藤阿具さんの家も残つてゐる、と云つて案内して呉れたのもT氏だつた。T氏は、帝大の学生時代から親しかつたそのあたりの古い家々をなつかし気に、詳細に説明して呉れた。あの時の姿は忘れ難い。

戦争中、東京の街々が次々に他愛なく灰燼となつてゆく頃の思ひ出ならば、私にはまだ沢山ある。その頃の詳しい日記も私は持つてゐる。東京に最後までふみとどまつてこつこつと仕事をしてゐた幾人かの文学者も知つてゐる。然し今はそれを言ふ場合ではない。その中でも、とりわけ私には忘れ難いこの二人の人のことを書けばよいのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

今や東京は「つはものどもがゆめのあと」である。あれから五年、満目荒涼と私は云ひたい。街々のよそほひが如何に華美にならうとも、戦争と云ふ悪鬼によつて無理無体に打ち毀された現実に、伝統の美はない。みな借物であり、みせかけであり、虚偽である。敗戦と云ふ条件の苛酷さは、人の心までも物質同然、荒廃せしめずには措かなかつた。

私はふと近代文学が歴史化される段階と云ふものを考へた。その第一は明治三十七八年の日露戦争、次は明治と云ふ年号の大正への改元転換時代、そして大正十二年の関東大震災。今度の大戦禍はその決定的なピリオドともなつたやうである。そのピリオドを考へる時、私はいつも先の二人のことを思ひ出す。

古きものは滅びる、それは自然の理であらう。新しきものは古びる、これも自然の理である。私はよしないことを繰り返すつもりはない。滅び去つたものならば、それを蘇らせても詮ないことである。然し、それらの歴史は本当に滅び去り古び去つたものだらうか、と私は反問する。否！　もし滅び去つたものだとしても、滅び去つたものを知らなければ、生々流転の法理さへ、私には納得出来さうもない。

さう思つて私はとある冬の日に、新しい東京の文学散歩を思ひ立つた。昭和二十五年十二月某日のことである。近代文学の足跡を求めて、と云はうか、それとも、心のあとを求めてと云はうか。それはどちらでもよい。私は東京生れではないから、懐古の情にのみ誘はれて歩かうとするわけでもない。云ふならば、過去を惜しむ、又、冢中枯骨を拾ふ代りに、冢中宝玉を求むる気持からである。

私は著古した破れ外套のポケツトに黄色の鉛筆一本と、小さな手帳、それに一冊の新東京地図といふのをしのばせた。これがすべてである。履き馴れた日和下駄に蝙蝠傘といふあの三十六年前の「日和下駄」の雅士とはくらぶべくもない私の心と姿である。日和下駄の緒ならぬ、靴の紐を締め直して、折からの木枯に思はず外套の襟をかき立てたのである。

「於母影」の町

近代文学は誰が興したか。その自問にはいろいろな答が出た。色々な答の中から私が先づ選び出したのは森鷗外の名であつた。鷗外を選び出したのも、私にとつて、この文学散歩を思ひ立つた、そのことに直接因縁があつたからでもある。

鷗外の名で有名な訳詩集「於母影」のことは知らぬ人もないが、その本の内容が編まれた町の名は殆ど知る人もない、と云へるだらう。さう思つたとき、私の足は先づ、上野花園町に自然に向つたのである。

鷗外はドイツ留学から明治二十一年に帰朝して、当時の下谷区（今の台東区）上野花園町十一番地に寓居した。その頃市村瓚次郎、井上通泰、落合直文及び鷗外の妹喜美子、弟篤次郎（三木竹二）等と自宅を会場に、しばしば文学を論じ詩歌を作り、その会を育てて新声社と称し、S・S・Sの符号を使用した。翌二二年八月の雑誌「国民之友」夏季附録に、和漢英独の詩を、意義、韻法、字句、平

仄などに従つて自在に訳した詩集「於母影」がS・S・Sの名で発表された。この訳の大半は鷗外の手になつたものであるが、他に市村瓚次郎、落合直文、井上通泰、森喜美子が加つてゐた。この訳業が明治十五年の「新体詩抄」以来の日本文学を、飛躍的に近代化する偉業であつたことは云ふまでもない。

その年の夏の一夜、S・S・Sの社中一同は、花園町の森邸の二階に集つて徹夜で一巻をなしたと云ふことである。花園町は不忍池に臨んだ町である。「於母影」の生れた歴史的な夜も、池の面を渡つてくる涼風が蓮の花をかすめて、社中一同の希望と野心にもえた額をあつめる部屋に流れ込んでゐたであらうと想像することも出来る。

この家では、そのほかに鷗外の出現を世に知らしめた処女作小説とも云ふべき「舞姫」や次の「うたかたの記」も生れ、又、「於母影」の稿料五十円によつて雑誌「しがらみ草紙」が発行されはじめたのであつた。

そのやうな、すべて鷗外初期のロマンテイツクな文学に、夢を描き、花園町と云ふ美しい名の暗示に、いささか酔ひ心地でその地に立てば、ああ、これは又何と云ふ幻滅であらうか。又は悲哀と云ふべきか。

今日の花園町はうらぶれた、翳りの多い町である。南の一角は遠く埋立地をこえて不忍池に面してゐるとは云へ、それも形ばかりで、東側は上野公園の東照宮と動物園の埃りつぽい樹立に遮られて、ひつそりと陰気な感じでさえある。この一角は上野の森蔭に小さくかたまつてゐるためか、大正十二

年の震災にも難を脱れ、今度の戦災からも免れたが、それだけに、町は古くて昔のままの町家や老鋪なども残つてゐるが割合に活気に乏しく、軒の傾いた家の間を傷んだままの通路が続いてゐるばかりである。町角から町角へ、私の捜し求めた六十年前の十一番地は、現在近藤金八郎と云ふ人の屋敷で、最早旧森邸の形影があらう筈もなかつた。昔は上野の花畑だつたと云ふ、四季とりどりの花を咲かせたその名残は花園町と云ふ町の名にとどめられ、年は古りた。それも夢、これも夢。私は手帳の中に「於母影」の町とのみ書きとどめて、次の場所を求めることにしたのである。

露伴の「五重塔」

上野花園町から上野の公園の道を登つた。上田敏や鷗外の青楊会を始め多くの会合のあつた精養軒前を過ぎて、冬日にきらきらと光る不忍池にも別れ、私は、丘伝ひに歩き出した。東照宮、戦後大きく拡張された動物園、国立博物館、上野図書館、寛永寺前、旧音楽学校の東京藝術大学裏をすぎて、桜木町から谷中道へと歩いてゆく。谷中天王寺への、昔の面影を辿るために、私の選んだ道順である。殆ど戦災のあとはないが、戦後の疲弊は被ふべくもない。壊れたままの塀や、軽薄な店飾りの家々軒々。私の心の目は出来るだけそれをみるまいとする。そして天王寺の墓地にある、幸田露伴の小説で知られた、あの「五重塔」の頂を、まだかまだかと行手の中空に捜し求めてゐる。

「五重塔」は露伴小説の代表作、すくなくとも最も人口に膾炙された名作と云へる。主要舞台は谷中

感応寺五重の塔である。感応寺は今の天王寺の日蓮宗時代の寺名であると云ふ。主人公のつそり十兵衛のモデルはこの墓畔の銀杏横町に住んだ頃の露伴が知つていた「倉」と云ふ実在の大工だといふ。

上野から桜木町をすぎ、繁盛の街区から、突然天王寺の緑の墓地が眼前にひらける。華美な町家とは凡そ反対な、しつとりとしてがつちりとした建具の色も古錆びた墓地入口右手の、一軒の人気ない家。ガラス戸が打ちめぐらしてあつて、中の、テーブルに椅子を四五脚置いた土間が水を打つたやうに黒くしめつてみえる。墓参の人の休憩処である。家の前に小さな手桶に投げ入れた仏に手向ける樒のの束が五つ六つ。

墓地に入ると、今まで歩いて来た街とは趣きが一変する。墓石の間に青々と繁る常緑の木々がしづかである。私の訪ねる五重の塔は墓地のほぼ中央に当る交叉した道路の角に泰然として聳えてゐた。

威風堂々と四辺を睥睨するとでも形容しようか、又、寛政三年十月建立以来約百六十年、ただ凝つと生き耐へて、不退転の心を中空に訴へ続けてゐると云はうか。五層の高さ八丈五尺八寸、露盤から九輪の高さ二丈七尺、すべて欅作りのこの五重の塔は、一般の寺塔とは少し異なり、江戸民間の大工の手になつたものだけに、飾り細工も建ち具合も、藝術的形態には乏しいやうであるが、今は永い歳月の風雪に黒々と色づいて錆び、四面三扉を堅く閉して沈黙してゐる。

時は一月の末つ方、のつそり十兵衛が辛苦経営むなしからで、感応寺生霊塔いよ〳〵物の見事に出来上り、段々足場を取り除けば次第々々に露るゝ一階一階また一階、五重巍然と聳えしさま

……

と流るるやうな露伴の名文が、私の脳裏をかけめぐり、塔の裾をそのまま一巡り又一巡り、やがて私の心にクライマックスの嵐の場が蘇ってくる。心安からぬままに嵐を衝いて夢中で馳けつけた十兵衛、

此処は、おゝ、それ、その塔なり。上りつめたる第五層の戸を押明けて今しもぬつと十兵衛半身あらはせば礫を投ぐるが如き暴雨……

どう〳〵どつと風の来る度ゆらめき動きて荒浪の上に揉まるゝ棚無し小舟のあはや傾覆らむ風情

……

空想に酔ってか、餘りにも高い塔を見上げすぎてか、私は思はずよろめいた。辺りを見渡すと、今はまだ周囲の垣根が僅に塔を守って保護建造物の名のみとどめてゐるだけで、戦後の荒廃はここにも歴然としてゐる。何時のまにか悪童に悪青年を交へた今流行の危い道路野球が、塔前で始められてゐる。容赦もなくボールは五重の塔の壁にも飛ぶ。附近の墓石にも当る。この塔の下に「露伴文学碑」の建つ日を空想してゐる私の心を、ボールが容赦もなく掻き乱す。

露伴翁の在りし日の面影を、私はまざまざと心に描きながら、ただ凝っと目をつむった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com